



＜南高梅の花＞

温暖な南房総では2月ごろから開花し
初夏には枝もたわわに沢山の実をつけ
てくれます。 <拙宅の庭先から>

間もなく師走、長い猛暑に悩まされ続けた今年も残り少なくなりました。会員諸兄、ご家族皆様方の益々のご健勝、ご多幸と輝かしい新年を迎えられるよう祈念申し上げます。

あわせて隊友会活動についてのご理解、ご協力のほど
よろしくお願い致します。

＜支部長 川村 巖＞

支部の活動概要

＜10・11月の活動予定＞

10.10(木) 館砲校予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
10.20(日) 館山航空基地開隊71周年記念行事
10.24(木) 隊友会説明会(館山航空基地)
11.15(金) 館山航空基地殉職隊員追悼式
11..30(土) 11月支部役員会(コミセン)

＜12・1月の活動予定実績＞

1月初旬 第21空群司令年始表敬
(海自OB3団体代表)
1.31(金) 県隊友会部隊研修(下総基地)
2. 1(土) 1月支部役員会(コミセン)

令和6年度県隊友会部隊研修について

令和6年度千葉県隊友会部隊研修が次のとおり行われます。

期 日；2025(令和7). 1. 31(金)
場 所；海上自衛隊下総航空基地
研修内容；基地見学(訓練装置、基地資料室ほか)
ハイライトはP-1型対潜哨戒機(写真)の実機見学

交通便；公共交通機関、私有車 基地集合 09:30
昼 食；隊員食堂で隊食喫食 (500円)

参加を希望される方は12月20までに支部事務局までご連絡下さい。

参加希望者には別途細部について連絡します。



＜P-1型対潜哨戒機＞

P-3 Cの後継機として技研・川重が共同開発
ターボファンエンジン4基、現在30数機が部隊配備
(防衛省HPより転載)

＜支部事務局＞

新年会のご案内

次のとおり新年会を開催します。支部として今まで計画したことはありませんが、榎本館空会会長のご配慮で館空会と合同で行うことになりました。旧交を温めるとともにかつて志を同じくした皆さんとの新しい出会いを求め
る場・機会でもありますので、皆さんふるってご参加下さい。

日 時；2025. 1. 14(木) 18:00～20:00

会 場；「花しぶき (市内塩見233-4 Tel.29-0236)」

会 費；7,000円 送迎便；参加希望者に別途連絡することになります。

回答期限；12. 20(金)まで 支部事務局まで Tel.22-0230

なお、館空会に所属する会員は館空会からの案内で返信して下さい。

＜支部事務局＞

隊友会事業の紹介 (保存版)

(隊友R5(2024).11.15号折込み)

隊友会が会員の福利・厚生を目的に行っている団体保険や各種サービス等の事業について
カラー刷りの保存版で分かりやすくまとめたものです。大いに活用して下さい。

雑 想「続・吾妻鑑に垣間 (かいま) 見る鎌倉幕府」

以前この場で「吾妻鑑」について紹介したことがあります、その後訳本を拾い読みするにつけ今まで知らなかったことなどがありましたので再度紹介することになります。 日本各地には戦国時代の武田信玄の「信玄堤」や豊臣秀吉の「宇治川太閤堤」など、水利治水事業の跡が残されていますが、鎌倉市一帯にも小河川や排水路など鎌倉幕府が水利事業として力を注いだ跡が今でも各所に見られるということです。吾妻鑑の中にも記述を見ることができますが、これについてはNHK番組のプラタモリでも紹介されたことがあります。

なぜ頼朝と義経の間に確執が生まれたのか 平家を滅亡に追い込んだ立役者の義経が頼朝と対立し、最後は奥羽に逃げ延びて非情な最後を遂げたと伝えられておりますが、義経の人生の後半部分については伝説めいた話を含めてエピソードには事欠かないですね。 頼朝との間になぜこのような確執が生まれたのかについては分からないことが多いので、吾妻鑑にもその記述を見ることはできませんが、もともと両者は異母兄弟で兄弟としての情・絆が無くても決して不思議ではないと思うのです。軍事・戦術の大家である義経には、“政治的な感覚が欠如”していた点と“武家としての主従関係の基本を理解していない(無視した)”点が致命的な欠陥であったと指摘する歴史研究家もおります。また武家勢力の台頭を危惧する朝廷(後白河法皇)が、戦略の大家頼朝と戦術の大家義経を“仲違いさせる”ための差し金、裏面工作を働かかけたということもかなり有力な説のようです。

幕府の一大スペクトル「富士の巻狩り」 これについては「吾妻鑑」(1192年建久4年編)にかなり具体的に記述されています。

吾妻鑑5月8日条は、「富士野藍澤ノ夏狩ヲ覧ンガタメニ駿河国ニ赴カシメタモウ」と頼朝が出かける記述から始まっています。狩りと言うと当初、頼朝の趣味・道楽程度の認識しかなかったのですが、期間も5月8日から6月7日まで一か月近くに及び、それに先立ち参加者の宿泊や炊火所等の設営に大がかりな準備が費やされているのです。 参加した御家人・武士だけでも数十人の名前が連ねられ、ほかに足軽、射手や勢子(鳥獣を駆りたてる人夫)等々実に多数の人員が加わったことが分かります。この巻き狩りの目的は征夷大將軍としての権威の誇示とともに御家人・武士の士気・術力を高めるための「大軍事演習」にほかならないのです。現代版「(陸自)富士総合火力演習」というところでしょうか。 この巻狩りの最中に起きた「曾我兄弟の仇討ち(5月28日)」は、日本三大仇討ちとしても知られ、吾妻鑑の28日条の中にも記述がありますが幕府の威信にかかわる衝撃的な出来事だったと言われております。

頼朝の最後 建久9年暮れに相模川の橋の落成記念式典に参加した帰途、落馬で負傷したのが原因ということで翌建久10年(1199)1月13日に享年53歳の生涯を閉じております。鎌倉に幕府を立ち上げた1192年からわずか6年余の短い栄華でした。 ただこの前後のことについては“吾妻鑑の空白の3年間”と言われるように記録が残されていないのです。記録の消失ではなく、「混乱時期にあった幕府の状況を書き残さない」という関係者の配慮によるものという歴史研究者の見方に一理あると思います。 <匿名会員>

「開戦前夜?の館山航空隊はどうだったのだろうか」

・・・と言っても日米開戦(S16. 12)直前の館山航空隊(「館空」)の状況を知ることのできる旧軍の記録資料は皆無に等しい。昭和5年に開隊した館空がどのような経過を辿って開戦を迎えたのかは分からないが、館空が開隊した昭和5年前後は上海事変(1次、2次)に始まり、満州事変から日支事変(日中戦争)へと拡大、中国大陸をめぐる情勢は日増しに険しさを加え、そしてS16年の大東亜戦争勃発からS20年の終戦まで”15年戦争”と言われるように、館空は”戦争とともに歩んだ15年”と言えるであろう。この中から開戦前夜の状況をが読み取ることができるのかもしれない。

日米開戦までの館空の足跡

開隊とともに艦載機搭乗員養成の重任を担った館空は、大村空とともに機種別・実用機の操縦教育に専念した。 S10年度の海軍航空事故集計によれば、この年度だけで100件近い航空事故が発生し、いずれも「大事故」であり、このうち館空は10件、7名の殉職者を数えている。鷹の島に「館空航空神社」が建立されたのもこの時期のことである。

この年、館空は陸上攻撃機(「9試陸攻」)の開発試験を担当し、翌12年には運用試験を経て「96式陸上攻撃機」として制式採用され木更津に配備された。 8月の日支事変の勃発とともに中国大陸への渡洋爆撃を敢行し欧米列強を驚かせた。中国での航空作戦はさらに拡大し、空母艦載機の出撃が頻繁に行われるようになった。さらにこの時期から航空部隊の大幅な増設が帝国議会で認められ、搭乗員の養成所要の飛躍的な増大とともに訓練も実戦的な度合を増したであろうことは想像に難くない。

以前紹介したことがある南房総増間村の大日山山頂付近に建てられている「海軍機遭難の碑」は、S16.6編隊訓練中の館空所属の艦上攻撃機であり、また平砂浦の館空爆撃演習場での訓練中の事故など、当時の訓練の激しさを推し測ることができよう。

後方分野においても、委細は分からないがS16年に館空に対して八丈島の飛行場建設や防備強化のため大幅な基地要員の派出が下令され、このような状況下、館空司令から要員の窮状・補充の必要性を切々と訴える陳情が横須賀鎮守府司令長官に出されている。

日米関係の推移、外交交渉・「ハルノート」の意図・真意は？

米国に対する日支事変の調停の期待とは裏腹に、米国は100機のP40B戦闘機はじめ多数の車両、弾薬類を中国に供与し、さらに250名余の元空軍パイロットを中国に常駐させて空軍力の強化に努めるなど、事変の長期化、泥沼化に拍車をかけた。

S16.4に野村駐米大使とハル米国务長官との間で始められた日米交渉を皮切に、日米開戦の直前まで50回近く交渉が続けられたが、最後に日本側に提示されたのは「最後通牒」とも言うべき「ハルノート」であった。日本に対して「幕末に戻れ」を要求するものであり、挑戦状、「宣戦布告」となんな変わらないのではなかろうか。

この直後に米参謀本部が在比(フィリピン)陸軍総司令官マッカーサーほか各地の指揮官宛に発した「開戦近し、警戒を厳にせよ」の電報(米国立公文書館保管記録)を、日本としてどう理解したらよいのだろうか。米国の「思うつぼ、米国が画策したとうり事が運びつつある」ということなのだろうか。ここに米国の真意があるのではなかろうか。

標題は「開戦前夜」としているが、開戦直前の彼我の状況を知ることが目的ではない。真珠湾も原爆も知らない世代が少なくない今日、声を大に「二度と戦争をしない、恒久平和、話し合いによる平和的な解決」が叫ばれているが、歴史の真相、世界の現実の姿をもっと追究しなければならないと考える。日本が戦争に巻き込まれた(始めた?)真因が本当に明らかにされているのだろうか、素朴な疑問が頭から離れないのである。 <地域史探索マニア その48>